

体験活動を生かした子どもの心に響く道徳の授業

-豊かな勤労観や生命を尊重する心の育成を核として-

長期研修員 中川 秀男

Nakagawa Hideo

要 旨

勤労観や生命を尊重する心を子どもにはぐくむために、それらについて考える基となる学校における体験活動を整理、分析した。さらに、子どもがそれらについて自分のこととして、より実感をもって考えることのできる道徳の授業の在り方について考察した。

キーワード： 勤労観、生命尊重、体験活動を生かした道徳の授業、指導の工夫

1 はじめに

昨今の青少年を取り巻く社会環境やモラルの低下から、学校における道徳教育の役割はますます重要になっている。社会体験や自然体験の機会が減少し、バーチャルな世界で遊ぶことの多い子どもたちは、相手の気持ちに共感したり、自分の気持ちを伝えたりすることが苦手であり、人間関係を形成する力が弱くなってきているように感じられる。最近のニュース等で伝えられることの多い青少年による痛ましい事件・事象、またニート問題などは、それらのこととの関連が指摘されており、生命を大切にする心や豊かな勤労観を子どもたちにはぐくむことが、今一層強く求められている。

そこで、学校における道徳教育のかなめである道徳の時間を子ども心に響くものにするすることで、働く喜びや生きることのすばらしさ、生命の尊さなどの道徳的価値の自覚を深めさせたい。そのために、学校における体験活動をはじめ、自分と向き合って道徳的価値について考える基となる体験の充実を図るとともに、それらの体験を道徳の時間に生かして、より心に響く学習とする方策について研究を深めたいと考える。

2 研究目的

体験活動を生かした子どもの心に響く道徳の時間の在り方について、豊かな勤労観や生命を尊重する心の育成を核としながら考察する。

3 研究方法

- (1) 子どもにはぐくみたい豊かな勤労観や生命を尊重する心について考察する。
- (2) 体験活動との関連を図った道徳の時間の計画及び実践を行う。
- (3) 実践を通して成果と課題を明らかにする。

4 研究内容

- (1) 子どもにはぐくみたい豊かな勤労観や生命を尊重する心について

ア 勤労観の広がりを目指して

平成17年度奈良県キャリア教育研究委員会「生活、学習、仕事についての意識調査集計結果」（資料

1）によると、「お金のために」働くという生徒が増え、「自分の夢に向かって」「人や社会のため

に」働くという意識が低いことがうかがえる。また置籍校の高学年児童へのアンケート（資料2）では、当番活動や係活動に対する意識が低く「めんどくさい」、「だるい」という回答が多く見られた。

これらのことから、働くことが自分のためになるだけでなく、人のため、社会のためになるという視点から、働くことの意義についてとらえさせることが大切である。実際の体験活動の中で子どもが感じるであろう働くことにかかわる思いや考えを整理し、それらとの関連から道徳の時間のねらいを明確にすることで、豊かな勤労観をはぐくみたいと考えた。

イ 「生命尊重」を自分とのかかわりで考える

昨今、子どもにかかわる痛ましい事件・事象を見聞きすることが多い。「命は大切である」ということは知識としては理解しているが、そのことが自分にとってどういうことなのか、そのためにどうしていくことが大切なのかが自覚されていないことを子どもたちの生活の中から感じることもある。

そこで、命の大切さを自分とのかかわりで実感させるため、体験活動の中で感じた「生命への思い」を道徳の時間に振り返り、より深めさせたいと考えた。生命に触れる体験活動を整理し、それらの体験活動を生かして道徳の時間を構想した。

(2) 体験活動を生かした道徳の時間の実践

ア 豊かな勤労観をはぐくむ道徳の時間の実践例（5年生）

(ア) 道徳の時間①（資料3）

○主題名 自分の役割に責任をもつ

資料名 森の絵（読み物資料とその利用「主として集団や社会とのかかわりに関すること」文部省）

○ねらい 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し協力して主体的に責任を果たそうとする心情を育てる。

○展開

導入

1 曾爾高原で実施した野外活動での役割について思い出す。

展開

2 資料を読んで話し合う。

◇道具係になって、絵筆に力が入らないのはなぜでしょう。

◇えり子は文男のことをどんな人だと思ったのでしょうか。

◆えり子はどんなことを思いながらポスターカラーをといているのでしょうか。

3 自分の生活を振り返る。

◇自分の仕事に一生懸命に取り組んだことはありますか。

終末

4 野外活動や委員会活動などのスライドを見る。

○児童の様子・反応

道徳の時間の導入では、曾爾高原で実施した野外活動を取り上げた。写真を提示することで、楽しかった思い出がよみがえり、授業に対する興味・関心が高まった。資料を通じた話合いでは、特に、主発問でワークシートを活用し、じっくりと自分と向き合いながら考えを深められるようにした。進んで発言することが苦手な児童も、一度書くことで自分の考えをまとめることができ、活発な発言につながった。

展開後段の自分の生活とつなげて考える場面では、「曾爾高原で食べたカレーは、自分の仕事をみんながしっかりできたので、とってもおいしかった。」という発言など、野外活動での経験を想起した児童が多かった。自分の果たすべき役割に精一杯取り組もうとする資料中の主人公に、野外活動での自分たちの姿を重ね合わせながら、役割や責任を果たすことの大切さを改めて実感していたようである。また野外活動だけでなく、委員会活動などでの経験についても話し合わせ、「体育

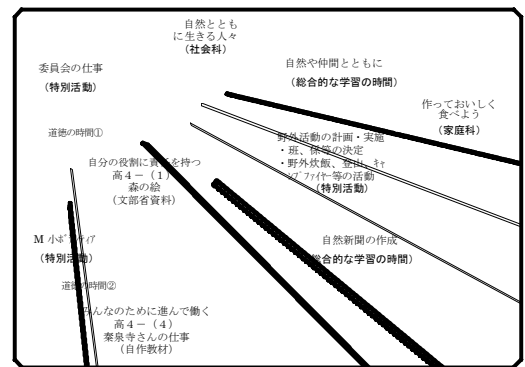


図1 道徳の時間と各教科等との関連 5年生

委員会のプール掃除でブラシの担当をしたかったけど外れたので、バケツの担当を最後までがんばった。」「図書委員になりたかったけど、今は掲示委員をがんばってやっている。」などの発言が聞かれた。これらは資料中の「（自分が望まない役割でも）誰かがやらなくては劇が成り立たない。」という言葉をもとに、役割や責任について話し合ったことが生きていたのだと考える。こうした話し合いを通して、お互いの活動を認め合ったり、友達への見方が変わったりする場面が見られた。何より友達と力を合わせて活動をやり遂げた達成感が児童たちにあり、そのことが自己有用感をはぐくみ、これからの意欲や態度を養う上で効果的であったと考える。

終末では、これからの生活の中で実践につなげようとする思いや願いをあたためられるように、野外活動はもちろん、様々な学校生活の場面で自分の仕事に一生懸命取り組んでいる児童の姿をあらかじめ撮影しておき、スライドショーにして紹介した。うれしそうな顔で自分たちの姿を見つめている児童の姿が印象に残った。

(イ) 道徳の時間②（資料4）

○主題名 みんなのために進んで働く

資料名 秦泉寺さんの仕事（自作教材）

○ねらい 自分から進んで人のために働く人が身近にいることを知りその思いを考えるを通して、人や社会の役に立とうという気持ちをはぐくむ。

○展開

導入

1 写真を見て話し合う。

展開

2 資料を読んで話し合う。

◇おじさんはどんな気持ちで毎日安全指導をしているのでしょうか。

◆なぜおじさんは、安全指導を続けているのでしょうか。

3 自分の生活を振り返る。

◇人の役に立つ活動をしたことがありますか。

終末

4 秦泉寺さんの話を聞く。



写真1 導入時に使用した写真



写真2 学校ボランティアの様子

○児童の様子・反応

特別活動で「M小ボランティア」を11月初旬に行った。近所の公園でゴミ拾いを行った後にとった児童の感想は、

- ・ごみが植え込みにいっぱいあっておどろいた。
- ・きれいになってすっきりした。
- ・別の公園のごみ拾いもやってみたい。

などであった。これらを道徳の時間に振り返らせながら、働くことの大切さを自分のこととしてとらえさせようと考えた。そこで「お仕事カード」に感想を記入させておき、いつでも見られるようにしておいた。

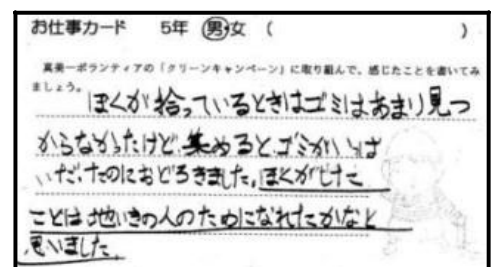


図2 児童の「お仕事カード」の書き込み例

道徳の時間では主発間で秦泉寺さんが安全指導を続けている理由を問うと、はじめは「安全に登校してほしいから。」「町のために何かしたいから。」という発言が多かったが、話し合いが深まるにつれ児童たちは、「みんなが楽しく元気に登校するとおじさんもうれしくなるのではないか。」「この仕事をしてやりがいがあるのではないか。」など、人の役に立つことのすばらしさ、喜びについて思いを巡らせていた。

展開後段では、自分たちのしていることとして、

- ・僕は委員会活動がんばってるんだよ。
- ・私は募金活動をしたことがあるよ。
- ・僕は家の人の肩たたきを続けてるんだ。

などの意見が出された。「人のために、社会のために働く」ことの大切さとともに、自分たちの中にも秦泉寺さんと同じ思いがあることを確認できたようである。その喜びや自己有用感こそが、今後の実践意欲につながるものであろう。



写真3 秦泉寺さんの思い

終末には「みんなの役に立つことは、自分の喜びである。」という秦泉寺さん自身の思いを直接聞くことで、今後に向けての思いをあたためるとともに、授業が児童の心に強く残るものとなった。

(ウ) 考察

5月と11月に、勤労に関するアンケートを児童対象 表1 当番活動や委員会活動について【5月→11月】(人) に行った。11月のアンケートからは、学年当初から当番活動を苦手としていた児童が、「みんなで協力して仕事が早くできるようになった。」と答えるなど、仕事に対する考え方が変わりつつある姿を感じた。

	とてもすき	どちらかというとき	どちらかというときない	とてもきらい
5年1組	3→7	21→20	9→6	2→2
5年2組	8→9	19→20	5→5	3→1
5年全体	11→16	40→40	14→11	5→3

また、

- ・先生や友達に認められたり感謝されたりしたときにやってよかったと感じた。
- ・仕事をして喜んでもらえてうれしい。
- ・1年生の役に立っていると思えるようになった。

などという感想が多く見られるようになった。これらは、5月には少なかった意見である。実際に当番活動や委員会活動に意欲的に取り組んでいる場面も徐々に増え、自分の仕事への責任感やみんなのために働く喜びが児童に内面化しつつあるように感じられる。

イ 生命を尊重する心をはぐくむ道德の時間の実践例（6年生）

(ア) 児童の実態から

6月に、兵庫県教育委員会が作成した「命の大切さ実感尺度」（資料5）を用いて置籍校6年生の実態調査を行った。これは、命の大切さを児童生徒が日常生活でどの程度実感しているかを知るために、自己肯定感や達成感、愛される喜びなどの生命尊重にかかわる領域を18項目に分けて調査し分析するものである。その結果からは、置籍校6年生の自己肯定感や自己有用感が低い傾向が見られた。今後の学校生活において、いろいろな場を通じて自分を大切に思う気持ちや「できる」という自信などをはぐくんでいくことの必要性を感じた。

また、児童たちに「命が大切だと思ったのはどんなときですか。」と聞くと、親戚が亡くなったときや飼っていたペットが死んだときという意見が聞かれた。このことから「死」について考えることで「生」の大切さを認識しているという児童が多いことが分かった。そこで生命の有限性の視点から、今生きていることの尊さについて思いを深める授業を考えた。

6年生は広島への修学旅行を控えており、その際には被爆された方からの聞き取りも予定されている。そんな活動の中で考えたことを道德の時間に生かすことで、命を大切にすることは自分にとってどうすることなのかを考えさせたい。

(イ) 道德の時間（資料6）

○主題名 精一杯生きよう

資料名 「電池が切れるまで」（すずらんの会：角川文庫）

○ねらい 精一杯生きるとは自分にとってどんなことかを考え、自他の生命を大切にしていこうとす

る態度を育てる。

○展開

導入

1 生きている実感について考える。

展開

2 資料を読んで話し合う。

◇命と電池の違いはなんでしょう。

◇「そんな人を見ると悲しくなる」のはなぜでしょう。

◆「命がつかれたというまで精一杯生きる」とはどんなことでしょう。

3 自分の生活につなげて考える。

◇あなたにとって精一杯生きるとは、どんなことでしょう。

終末

4 指導者の話を聞く。

○児童の様子・反応

修学旅行前に「生きていてよかった」と感じる場面についてアンケートをとっておき、道徳の時間の導入でその結果を示し、中心とするテーマへの課題意識をもたせるようにした。児童は自分の意見と学年の結果とを比べ、楽しい雰囲気での授業は始まった。しかし、本時の資料を読み作者のおかれた状況や詩の意味を理解したときの児童の顔は、真剣そのものであった。主発問「(資料の主人公である)由貴奈ちゃんにとって精一杯生きるとは」について考えた際、ワークシートに書き込んだ児童の意見は次のようなものであった。

- ・自分のやれることをやりきる。
- ・家族や友達と仲良くしよう。
- ・病気を知り、好き嫌いせず食べる。

これらの意見を出し合い、話し合った後、自分自身と向き合せて考えさせるために、「自分にとって精一杯生きるとはどんなことなのか。」について考えた。児童からは、

- ・人と仲良くすること。
- ・人に親切にすること。
- ・毎日を元気に楽しく生きること。
- ・支えてもらっていることに感謝すること。

などの意見が聞かれた。6年生の児童にとって難しい発問ではないかと危惧していたが、児童が資料に入り込み、自分ならどうかと自分に重ねて考えたことが、活発な意見の交流につながったと考える。

また、修学旅行の体験を振り返らせる手立てとして、修学旅行の事後学習で書いた「命を大切にするためにカード」を教室に掲示しておき、修学旅行で感じたことを想起させた。改めて、今生きていることの尊さや、ありがたさを児童は感じていたようである。

終末には「命」をテーマにした「あいしてる」(大野靖之:東芝EMI「心のノート」)を全員で聞き生命に対するあたたかい思いをふくらませて学習を終えた。

(ウ) 考察

本授業の後、全校児童に広島への修学旅行で考えたことや自分たちの思いを発表や合唱で伝える報告

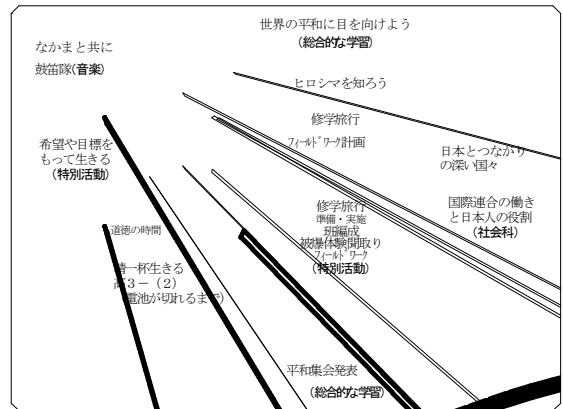


図3 道徳の時間と各教科等との関連 6年生

○ ゆきなちゃんにとって
 ゆきなちゃんにとって生きていくって、自分は病気で
 入院をくり返しているけど、命は神様がくれた大事な大事な
 宝物だから、たとえ毎日病院が大変なくらいでも、命を大事に
 してあげたい。最後まで、命がなくなるまで、がんばって生きる。

○ あなたにとって
 自分の命を、生かすために、自分なりの分まで、せいじょうに
 生きて、次の永遠にハハをわたす事。

自分の命を大切に生きていくのに必要なものを
 漢字1文字で表してみよう。
 その理由
 なにかがあっても、病もあっていけば、
 それに向けてくじけず、がんばるぞだから

図4 児童のワークシートの例

会を行った。その中に「自分たちの命をこれからどう大切にしていきたいか」という内容を児童たちは盛り込んでいた。まさに、道徳の授業で考えたことが生かされていた。普段の生活の中でも、人とかわることが苦手な児童が相手にやさしくしたり、他学年の児童に対して自分から世話をしたり、目標を新たにスポーツに取り組んだりする姿が見られた。道徳の評価ともかかわって、これからも様々な生活の場面で、児童たちの変容をしっかりと見取っていくことを大切にしていきたい。

5 研究結果と考察

道徳の授業をより子どもの心に響くものにするために、本研究では体験活動を整理、分析し、どのように生かしていくかについて考えてきた。体験活動の重要性は言うまでもないが、体験活動を道徳の時間にどう生かしていくことが有効であるかについてポイントを絞って研究を深めた。

道徳の時間の授業づくりにおいて、体験活動そのものを題材として道徳の授業で扱おうと、体験活動の延長や体験活動の振り返りの時間になってしまうおそれがある。大切なことは授業のねらいに沿って、体験活動で感じた思いを導入や展開、終末などそれぞれの場面での話合いに生かすようにすることである。それにより、自分とのかかわりで、より実感をもって道徳的価値をとらえることができる考える。授業の中で、児童が自分自身を振り返った際の「ぼくたちにも主人公と同じようなことがあったよ」という発言などは、そのあらわれであろう。自分自身を見つめ考えを深める営みが、授業を児童の心に響くものとしたのではないのだろうか。

また、それぞれの体験活動にはねらいがあり、道徳教育のためだけに行われるものではない。どの体験活動のどの場面を道徳の時間に生かせば、自分の生き方につなげてじっくりと考えを深めることができるのか。あるいは、道徳の時間に考えたことが体験活動に生かされ、より体験活動を有意義なものとすることができるのか。そのためには、指導者が体験活動のねらいをつかみ整理しておき、道徳の年間指導計画作成の際に生かすことが大切である。

今回の授業の終末では、ゲストティーチャーに思いを語ってもらったり、自分ががんばっている姿をスライドショーで見たり、音楽を聞いたりする活動を取り入れた。資料の内容や学級の実態にあわせたそれらの工夫により、自己肯定感や自己有用感を高め、授業を児童の心に深く印象に残るものにするのできたのではないだろうか。このように余韻を残して学習を終えることで、これからの実践意欲や自分の生き方への思いをあたためることにつながると考える。

最近の児童の姿を担任から聞くと、自分に自信をもって活動に取り組んだり、友達と協力し工夫して活動に取り組んだり、他人に対して関心をもてなかった児童が友達にやさしい言葉をかけたりする姿が見られるようになってきているようである。「勤労」や「生命」について授業で考えたことが、そんな児童の姿として少しずつあらわれてきているのではないだろうか。

6 おわりに

本研究は児童の実態を把握し、研究授業を行うという担任教員の協力なしには進めることができなかった。研究を進めながら、今までの自分の授業で足りなかったところを振り返るよい機会となった。今後も、児童の発達段階に応じた体験活動の在り方や授業での生かし方を考え、充実した道徳教育を目指したい。

参考・引用文献

- | | | | |
|-----|----------|-------------------------|----------|
| (1) | 兵庫県教育委員会 | 命の大切さを実感させる教育プログラム実践事例集 | 平19 |
| (2) | すずらの会 | 電池が切れるまで～子ども病院からのメッセージ | 角川文庫 平14 |
| (3) | 相田みつを | にんげんだもの | 角川文庫 平12 |